

Parlando Interview

きき手：菅野里奈(演奏・創作学科鍵盤楽器専修[ピアノ]4年)



"ジョイ、 を共有する音楽

小曽根 真 先生

(おぞね・まこと)

ジャズピアニストとして第一線で活躍する傍ら、近年ではクラシック・オーケストラとの共演などジャンルを超えた活動をされている小曽根真先生。そんな先生の音楽への想いを伺いました。

紫綬褒章受賞

— 紫綬褒章受賞のご感想はいかがでしょう。

小曽根 やっぱ、今、一番の感謝の根幹は妻ですね。そして、僕を支えて下さった方、僕を引っ張ってくれた音楽家の方、ジャズのミュージシャンたち…ここ十何年でどれほど多くの一流のクラシックのミュージシャンの皆さんに引っ張ってもらった事か、それを考えたら感無量です。僕は昔、クラシックを毛嫌いしていた一時期があった。でも今回の受賞は、ジャズとクラシックのジャンルを超えてブリッジを創った点を評価いただきました。これで今までお世話になった皆さんへ、ひとつ恩返しが出来たのではないかと考えています。僕を信じて支えて下さった皆さんに喜んでもらえる、ひとつのご褒美をいただけたのではないかなと思っています。だから、これは本当に僕が頂いたというよりも皆さんの賞だと心から思っています。

アメリカで過ごした大学時代

— 大学時代の一番の思い出をお聞かせ下さい。

小曽根 ほとんどいい思い出ばかりなのですが、実は僕は楽譜が得意ではなくて。メロディとコードがあればコード譜は読めますが、学生のコンポーザーがピアノ2段譜で書いてある曲を持って来る様な場合だと僕はダメなんですよ(笑)。いつも四苦八苦してかなりの時間が必要になってしまうから、先生が「オーケー。それ、ちょっとさらっとして」とか言ってきて、ピアノソロが終わったところから先をバンドで練習し始めるんです。

ある時に、いつも先生がそうしてくれるから、僕は自分から「あ、こ

こスキップしてください」と思わず言ってしまった。それが先生は気に入らなかったんだろうな。”PLAY!! We will wait”と言われたの。そして30人ぐらいいる前で、読めない譜面をこうやって1音を弾くのに10秒ぐらいかけて弾かされたんです。もう、あんな恥ずかしい思いはなかった。先生は、「いつかここはお前が通らなきゃいけない所なんだよ」とあえて恥をかかせたのだらうと思います。もちろん今は、それを感謝しています。その後、僕はわざわざ譜面を買ってきて譜読みの練習をするようになりましたから。本当は出来ていたんですよ、やろうと思う気持ちさえあれば。だけど、他の部分が弾けてるから、ここは別に出来なくていいと自分でずぼらして、そのまま放置していたから、そういう結果になったんです。

今は、学生に怒ったらダメだとか、仕事場で怒るなとか言うけど、僕は怒ってくれる人がいてくれることが幸せでしたね。

卒業してから今日に至るまで

— 卒業後のコンサートで一番思い出に残るコンサートは？

小曽根 卒業直後、カーネギーホールでデビューし、その後もいろんな場所で演奏させてもらいました。僕にとってはどのコンサートも同じくらい大切ですね。ハリウッド・ボールで1万5千人の前で弾いたことも、やっぱりすごく緊張したけど嬉しかったけれど、デイヴィッド・ゲフィン・ホール(旧エイヴリー・フィッシャー・ホール)でニューヨーク・フィルの定期演奏会に僕が出演したなんて、まだ信じられないですよ。N響さんとツアーをやる、ということだって未だに信じられないし、一昨年はN響の定期にも出演させてもらったん

ですよ。N響定期にクラシック界からピアニストとして出演するとしたら、どれだけの登竜門を通り、その市民権を得て、それで初めて出演するチャンスをいただく。それで良ければもう1回呼んでもらえるかも....みたいな、すごいレベルの世界だと思うんです。

—— 本学のSオケの定期演奏会にもご出演されてましたよね。

小曾根 あれだって僕にとっては、もう信じられない話ですよ。音大でクラシックを真面目に勉強している学生達の前でジャズの僕が出て行って大丈夫なのかなって、まあコンプレックスという訳ではないですけど....結果は最高に楽しいコンサートでした。きちんとクラシックを勉強してきている人達をバックに演奏出来るというこの喜びは。何故なら、それは本物だから。それを勉強してきている、その言葉をしゃべってきている人達と一緒にやるのが僕にとっては、やっぱり一番の勉強になるから。それはもちろんプロ、アマのオケなど、いろいろあると思うんですけど、一緒に出来るということで僕にとってはどっちもベター。コンサートひとつひとつが全部思い出です。

これは、恐らく読んだ人が元気になるかなと思うので、お話ししますが、さっきの楽譜が読めなくて恥をかいたことより、もっと打撃が大きかったことです。

バッハの生誕300周年記念コンサートでドイツのベルリンに行きました。バッハは即興の天才だったから、僕はマネジャーから即興だけやれば良いと言われて行った。当日の朝プロデューサーと話をしていたら「今日はバッハの曲は何弾くの？」って聞かれて「バッハの曲を弾くなんて聞いてないよ。僕は即興演奏をするために呼ばれた、と聞いてます」と答えたら「いや、生誕300周年記念コンサートだから弾かなきゃダメですよ。即興はもちろんしてもらうけど、その前にバッハの曲を弾いて、それに基づく即興という話なんだよ」と。「急にそんな事を言われても、僕はバッハのインヴェンションぐらいしか弾けないですよ」って言ったら「ああ、それでいい」ということになった。結果、一番弾けそうだった13番のa-mollを弾いたんです。人前で楽譜に書かれている音楽を弾くなんて経験は一度もない、しかももう10年間ぐらい弾いてないバッハを、バッハ生誕300周年記念コンサートで弾くなんて!...それで、ちゃんと弾かなければと思って、楽譜を買ってきて、夜8時の本番まで必死で練習して、とにかく暗譜。ほとんど覚えてはいたけど、もうドキドキしてしまって弾けないんです。結局、精神的なものに負けてしまったんだと思う。

この時、僕は初めて「あがる、ってということが解った。最初「ミラド」だから親指で「ミ」を弾かなきゃいけないのに、この親指が動かない。あんな経験は初めてだった。ゆっくり弾いたの、間違えないように。そして3か所ぐらい間違えたの(笑)。そして間違えた時にも間違えた顔をしたの。そうしたら、ザワザワと、なんでこんな人がバッハのコンサートに来てるの?という空気を感じた。おまけに、他のアーティストたちは全員バッハの御大家ばかりでしょ。その上、テレビ放送では、それぞれのパフォーマーの最初の3分間だけがヨーロッパ全土で放映されたんです。その後、僕は即興をやって会場のお客さんは何とか納得してくれたけど、テレビ放送ではそれが無いんですよ。きっと今の時代だったら、ネットで炎上、間違いなしでしょうね(笑)。

—— どうして断らなかったのですか。

小曾根 「ノー」と言い切れば良かったかもしれないし、あるいはその曲を使ってもいいから、自分なりに弾けば良かった。だけど、やっぱり自分もコンポーザーであるが故に、簡単にバッハの曲をジャズにするのが嫌だったんですね。バッハの曲は4声が動いて初めてバッハなんだから、あれを変えてしまったら、もうバッハじゃなくなるといったんです。絶対に。幾らでも変えることはできるけど、変えてしまっただけは意味がない。

—— その後どうなりましたか。

小曾根 人前で、あそこまで落ちた演奏をしてしまったということで、逆に、この先は何でも出来るという位の自信がついたのかな。ただ、その直後はもう僕は二度と譜面の曲(=クラシック)は人前では弾きませんと蓋を閉めちゃったんです。

その10年後ぐらいに、新日フィルから「《ラプソディ・イン・ブルー》をやりませんか」と誘われました。それと同時ぐらいにチック・コリアが「モーツァルト弾かないか」と言ってきました。どうしようかって悩んでいたら、妻が「あなたが悩んでいることは分かるけど、あのバッハの時はその朝言われてその夜だったでしょう。今回は半年あるんだよ。だから練習すればいいじゃない。練習したら大丈夫だよ」って言うてくれたんです。「じゃ、やるか」という事になって、ちゃんと練習したら今度はなんとかうまくいった。だからあの《ラプソディ・イン・ブルー》がなかったら、僕は今、クラシックはやっていないと思う。

—— そうしてクラシックに戻ってこられたのですね。

小曾根 はい、そうですね。いろいろなコンサートがあったけど、でも先程のバッハのコンサートのことで、恥ずかしい思いをしたことというのは、やっぱり皆とシェアしたい。皆さんそれぞれに、生きてきた中に、もうこういうことは思い出したくないというのが絶対あるはずですよ。でも、今、自分があるのは、それがあったからなんですよ。その悔しさとか、恥をかいたというのがあるからこそ、二度とそこに行かないように努力するんじゃないですか。

バッハのコンサートのことはやっぱり、僕が「ノー」と、その理由をきちんと言えばよかった。自分を守るためではなく、音楽的なことも



含めてね。あとは、練習不足だったら弾けないということも。やっぱりどんなに簡単な曲でも、練習時間というのが精神的なものの積み重ねになるということもそこで覚えましたからね。だから、これだけ練習したんだから、もう後はミスしたって別にいいやというぐらい練習出来ればいいと僕は思う。

クラシックとジャズの架け橋

— コンチェルトはセッションと同じでしたか？

小曽根 僕にとってコンチェルトというのは大規模な室内楽をやっている感じなんです。何をするかというと、スコアを買ってきて、スコアの全パートを自分で(キーボード)で弾いてコンピュータに打ち込んでオーケストラのカラオケを作っちゃうんです。それを聴いて練習する。そうしないと、怖くて弾けないんです。ガーシュインの《コンチェルト・イン・F》を初めて弾いた時、この曲を僕は知っていると思って、練習を自分のパートだけして行ったんですよ。そうしたら生オケで聴くと、CDでは聴こえないオーボエの音とかフレンチホルンとかがいっぱい鳴っていた。そうなる(あれ?そんなのあったっけ)と気が散って、自分のパートを間違えたりする。それからコンチェルトは全部打ち込んでやるようにしました。

— クラシックとジャズの違いはありましたか？

小曽根 ジャズとクラシックは合わせに関して違いは何もないです。ただ、リズムの取り方が、ジャズの場合はもう必ず歩くテンポのようにステディなリズムがあるんです。でもクラシックは、着地の仕方がいろいろあったりするじゃないですか。上がっていくところはエキサイトするから、テンポが微妙に行くじゃない。音符がリズムを作っていく、メロディからリズムを作るっていうの、これこそクラシックの演奏方法の醍醐味ですよ。

だけど、ジャズはそうはいかない。それをやると皆バラバラになっちゃう。考えてみるとクラシックのほうが自由なのかも。ジャズの方が型にはまる部分もある。ジャズは音符として弾く音は決まっていから自由ですけど、リズムはもう絶対的にステディじゃないとダメ。ステディなリズムがちゃんとある、その上に出来ているのがジャズで、クラシックの場合は僕から言わせるとメロディがリズムを作っている。だから、それを発見した時には(うわあ、何て自由な音楽だ)と思った。これは自由で楽しいと。その歌い方にその人の個性が出て、(ああ、この人はここでこういうふうには弾くんだ)と。

— 他に違いは感じていますか？

小曽根 即興音楽には基本的に間違いは存在しないんですよ。何が間違いかという、これやってもいいのかなと思うことが間違いなの。やってもいいかなと思う位なら、やらないほうがいい。やる!! それしかない。だから、僕がジャズ専修の皆に一番最初に言うのは、「やったもん勝ちだからね」。ただ、そこでエゴをやらなくて、ちゃんと聴いた中で自分がこの音欲しいと思った時にそのまま出して出て言うんです。そうしたら、「怖くて出せないです」というのね。当たり前だよ、自分を表現する事は怖いんだよ。でも、だから楽しいんだ

よ。そんなこと言ったら、コンチェルトだっど頭の音を弾くのは怖いでしょ。皆同じなんですよ、その怖さの種類は違うけどね。だって自分で音を出すということは、それはもう自分が責任とらなきゃいけないことだもの。

小曽根真の“ジョイ”

— 自分の音楽で一番大切にしていることは？

小曽根 “ジョイ”、喜びかな、やっぱり。芸術って形だけの高尚なものにしないで欲しい、と僕は思っています。もっと身近にいなきゃいけないものだと思う。とても近いものとしてお客さんに渡さなきゃいけないんだよ。聞く方がわざわざ勉強しなきゃ分からないような音楽は音楽じゃない。聴いてその瞬間に「ああー」と感じるから音楽なんだよね。凄いかどうかなんて、お客さんが感動の度合いによって決めればいい。

身体が生きていくために必要なものが食べ物だったら、心が生き続けるために必要なものが芸術なんだろうと思う。それを届けるという作業をする時に、絶対にお客さんに媚びてはいけないのね。お客さんが「素敵だな、これ」と思ってくれて、こちら側に引き込むためにはどうすればいいか。自分の世界に入って、自分がまず納得する音楽、自分が惚れる音色を出さなくてはならない。最初は人のためじゃない。まず自分のため、自分が感動しなきゃいけない。自分の音を聴いて涙出すぐらいの良い音が出るように魂込めて鍵盤を押す。そしてもしも自分にとって素晴らしい音が出たらその音を共有する。そこには“ジョイ”、しかないはず。

— 学生に向けてメッセージを。

小曽根 学生のうちに出来る限りの失敗をしてください。本当の自分を見つけてください。そして、レッスンに行った時に上手に弾こうと思わないで欲しい。もちろん、クラシックの場合はきちんと弾かなきゃいけないんだろうけど、でも、そこに自分ならこうするというものを出してみてもいいんじゃないかなと思う。そうすると面白いことに、その先生と自分との相性も見えてくる。だけど、そこで評価しちゃいけないですよ。先生には先生の絶対的な趣味がある。やり方がある。自分のやり方とまた違う。でも、どうしても自分は先生のように弾きたくないと思う、それは自然な事。ただ先生に要求された事ができた上で自分の弾き方をする、これは僕の目指す所。自分のコンサートになった時には、自分の弾き方で弾くべきだと僕は思う。

先生をはじめ他の音楽家の弾き方や解釈を学習することで、自分の音楽性も創れるんです。言われたことがまず出来ないと、それがいいか悪いかも分からない。だから、とにかく、学生の時に様々なことにトライ、チャレンジして欲しい。なぜなら、仕事として出演するコンサートで実験する事は出来ないから。学生のうちはまだ守られていると思うので、可能な限り、自分の限界とか、自分なりのイタズラとか、色々トライして欲しい。

そのためには、まず行動を起こさなきゃいけない。頭の中で(こうやっていいのかな、どうかな)って迷うんだったら、まずやってみてく

ださい。やって、どんな失敗をしても許される場所なんです、学校というところは。それで先生に「それ違うと思う」と言われたら、なぜ違うかをちゃんと先生に聞けばいい。ただ言われたことを「はい、そうですか」と鵜呑みにしないで欲しい。「何が違う、なぜ違う」と聞くのはすごく勇気が要るかもしれないけど、それで先生と言いあいになってもいいと思う。それでも「私はこう思います」と言って納得する

まで先生に聞いてみる。先生はそのためにいるんだから。そして、学生でいるうちに、社会に出たら出来ないことをたくさんやってほしい。もう、あり得ないほどの失敗をやってください(笑)。失敗は楽しいよ。いつの日か、それが自分だけの大切な思い出に変わるから。

— ありがとうございます(了)。



プロフィール

小曾根 真(おぞね・まこと)

1983年バークリー音大ジャズ作・編曲科を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、アルバム「OZONE」で全世界デビュー。

ソロ・ライブをはじめゲイリー・バートン、ブランフォード・マルサリス、パキート・デリベラなど世界的なトッププレイヤーとの共演や、自身のビッグ・バンド「No Name Horses」を率いるなど、ジャズの最前線で活躍。また、クラシックにも本格的に取り組み、NYフィル、サンフランシスコ響等、国内外の主要オーケストラと共演を重ねる。2011年より国立音楽大学演奏学科ジャズ専修教授に就任。

2016年には、チック・コリアとの日本で初の全国デュオ・ツアーを成功させ、17年にはゲイリー・バートンの引退記念となるツアーを催行。また、11月にはニューヨーク・フィル定期演奏会に招かれ、バーンスタインとガーシュインを熱演。このライブ録音は18年3月、「ビヨンド・ボーダーズ」と題して、小曾根真の初のクラシックアルバムとしてリリースを果たす。

映画音楽など、作曲にも意欲的に取り組み、多彩な才能でジャンルを超え世界的な躍進を続けている。2018年紫綬褒章受章。

オフィシャル・サイト <http://makotoozone.com/>

小曾根先生の楽譜とCD

～当館所蔵資料より～

